主題

蜂・ねずみ・いもりの死を目撃した主人公が生と死について考える物語

電車に跳ねられたが危うく助かった主人公は、後養生に行った城崎温泉で、蜂・ねずみ・いもりの死を目撃する。そして蜂の死から死に対する静かさ・親しみを、ねずみの動騒から静寂の前の恐怖を感じつつも「あるがまま」で生きようと思い、また、いもりの偶然の死では自分も含めて生き物の持つ寂しさを実感し、生と死とは両極端ではなく、それほど差のないものだという感慨を抱え込むことになっていった。

構成

構成 1

段落	ページ・行	段意
第一段	**第一節** 初め～ P一九六・5〈いたいものだと考えて来た。〉 **第二節** P一九六・6〈頭はまだ何だか〉～ P一九八・7〈親しみが起こっていた。〉	**第一節**　山の手線の電車に跳ねられたけがの後養生に、自分は一人で但馬の城崎温泉へ来た。 **第二節**　話し相手もない日々の中で、遠い先のことにしていた「死」を身近なものとして感じた。けがから助かったことをきっかけにして奮起したかったのだが、心は静まってしまい、「死」に対して親しむ心境になった。
第二段	P一九八・8〈自分の部屋は二階で、〉～ P二〇〇・9〈気持ちだったので弱った。〉	ある朝、自分は一匹の蜂が縁のわきの屋根で死んでいるのを見つけた。一つ所に全く動かずにいる死骸は、いかにも死んだものに感じられ、静かな感じを与えた。自分は寂しかった。しかしそれは静かだった。自分はその静かさに親しみを感じ、その静かさから過去に書いた小説のことも思った。
第三段	P二〇〇・10〈蜂の死骸が流され、〉～ P二〇三・5〈それはしかたのないことだ。〉	それから間もないころ、自分は、首に魚串を刺されて川でもがく一匹のねずみを見た。寂しい嫌な気持ちになる一方、死の静寂の前には恐ろしい動騒や苦しみがあることにも気づかされた。自分の場合を考えてみると、ねずみに近いものがあったが、不思議に死の恐怖はほとんど感じなかった。「あるがまま」で静かに死のうと、もがき苦しんで死のうと、どちらでもよい。それほど差はないことだと、自分は感じるのだった。
第四段	**第一節** P二〇三・6〈そんなことがあって〉～ P二〇三・16〈もっと知っていたと思った。〉 **第二節** P二〇四・1〈だんだんと薄暗く〉～ P二〇六・2〈自分を誘っていった。〉	**第一節**　それからしばらくしたある夕方、一本の桑の木を見た。物静かな雰囲気の中、一枚の葉だけが動く不思議な様子をしばらく見ていたが、風が吹いて葉は動きを止めた。 **第二節**　その後、薄暗くなった頃、脇の流れにいもりを見つけた。いもりを驚かそうとして自分の投げた石が、偶然にそのいもりを殺してしまった。自分は偶然に支配される生き物の寂しさを感じた。自分は、蜂やねずみのことを考えた。生きていることに感謝しなければならないような気もした。しかし生きていることと死んでいることに、それほど差はないようにも感じるのだった。
第五段	P二〇六・3〈三週間いて、〉～ 終わり	三週間いて自分はここを去った。もう三年になるが脊椎カリエスになるのだけは助かった。

構成2

城崎温泉の三週間の滞在を終えてから三年以上経った、「語り」の現在時

城崎温泉滞在を振り返る

けがの後養生で、一人で来た 考えるのはけがのこと・祖父や母の死骸 生きた蜂→いかにも生きている 死んだ蜂→いかにも死んだもの 殺されたる范の妻の静かさを描きたい	死ぬ前の動騒を繰り広げるねずみ ＝ああいう苦しみがあるのは恐ろしい ねずみの様子を自分のけがの記憶にあてはめて考える	いもりが死に至る様子を見て 脊椎カリエスになるだけは助かった
寂しい ＝死そのものへの素朴な感情 いかにも寂しい ＝死を生と比較しての感情	死に到達する前の動騒が恐ろしい ＝寂しい嫌な気持ち 動騒するのが本当 →しかたのないこと	偶然に生きた自分 →喜びの感じはない
死生観 寂しい・静かが両立 （生死は両極、 かつ同居）	死生観 寂しい面が強まる （生死は両極、 かつ分裂）	死生観 生死の差は ほとんどない
静かないい気持ち ＝「何らか」の死への親しみ いかにも静か ＝死への親しみ 死への親しみを言語化したくなる	死への親しみはある 死そのものには恐怖しない	偶然に死んだいもり